

戦災後・震災後・そして心理学のこれから

東京大学 名誉教授

東 洋 (あずま ひろし)

私が大学の心理学科に入ったのは1945年、終戦の年の4月だった。連日の空襲で日本の都市という都市は次々に焼野原となっていった頃で、大学に入っても申し訳のような講義が短期間あっただけですぐ勤労働員だった。8月の終戦後もしばらく混乱は続き、講義が始まったのは確か11月に入る頃だったと思う。その中で、高木貞二先生の初講義は特に印象が深かった。

ご自宅も戦災で焼けた先生は、それでも長身を毅然として、「日本は敗れた。今聞こえる飛行機の轟音は、昨日までの敵のものである。こういう状態のもとで講義をすることを私は予想もしなかった」と切り出された。そして「だがこうなった以上、私たちのやるべきことは、心理学を通じて日本をよみがえらせるのに貢献することだ」と握った拳で教卓をトン、トンとたたきながら続けられた。

そこでの先生の提案は二つあった。ひとつは「政治の心理学」。高木先生は整った知覚や学習の実験で知られておいでだったので、この提案は意外であった。日本が軍国主義に流されて辿った経過から、心理学は社会の意思決定に参画すべきと思われるのかもしれない。もうひとつは「国際性」であった。長い戦争と孤立によるブランクは大きく、戦前アメリカに留学された先生にはそれがよく見えたのだと思う。

今、東日本大震災以後の日本で、心理学のこれからを考えると、敗戦の荒廃の中での高木先生の提案が思い起こされる。「政治の心理学」は、人々の福祉と安全を支える社会のあり方の問題となろう。

「国際性」の課題も今なお重要である。国際的な活動は、勿論昔より盛んになっているが、それが日本の研究者の量や質に見合ったものとはまだ思えない。国際的な交流の中で学ばなければならないことも少なくない。戦後の日本の心理学の国際的認知度を一躍高めたのは1971年の国際心理学会大会だった。今また、2016年の大会を引き受けることになっている。日本は地理的、言語的に、努力して世界の舞台に出てゆかなければ独りよがりになってしまう。今度の大会を、さらなる国際性へのステップボードにしよう。今、高木先生ならどういうことを言われるかな、と思いながら、恩師をしのび、若い世代への希望をつなぐ。



Profile — 東 洋

1926年、東京生まれ。1949年、東京大学文学部心理学科卒業。1960年、米国イリノイ大学大学院修了 (Ph.D.)。清泉女子大学、日本女子大学助教授を経て、1964年に東京大学教育学部助教授、1971年に教授。1986年に定年退職後、白百合女子大学文学部教授、清泉女学院大学学長を歴任。専門は発達心理学、教育心理学、文化心理学。著書は『母親の態度・行動と子どもの知的発達：日米比較研究』（共著、東京大学出版会）、『日本人のしつけと教育』（単著、東京大学出版会）、『教育の心理学』（共著、有斐閣）など多数。